

## 永遠を思う心

松山義則



卒業生のみなさん。ご卒業をお祝い申し上げます。学窓を出て、新しい人生に歩み出られるときをおむかえになりました。早春のあたたかさには、よろこびと希望とがあり、そのつめたさには、きびしさと苦難がまちかまえています。

何年か前の夏、雨の日でしたが、生れたばかりの子猫が母猫にすてられて、雨にうたれていました。寒さにふるえていましたので、手のひらの上に二匹のせてかえり、しばらくの間でも生きてくれたらと願って、布でくるみ、ミルクなども口にくませてやりました。二、三日でも生きていたらと思っていました。一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、と、大きくなり、元気なぶちの雄と、とらの雌になって、なかよくコーヒー茶碗のなかに入ってやすむようになりました。成長するにつれて、庭にも出るようになり、おぼつかない恰好で木のほりにも挑戦しました。そして狩りをはじめ、バッタやセミをとってきました。とうとう庭に来た小鳥を襲

い、その美しい羽毛をひきちぎり、鋭い歯で身体をかみくだきました。猫をしかつておいはい、ぐったりとした小鳥を助けてやりました。瀕死の重傷を負う小鳥をどうすることもできず、動物園にある救急センターに運びましたが、数日後に、小鳥が亡くなったという知らせを受けました。

わが家の猫が小鳥を襲撃し、その生命をうばい、猫が小鳥の天敵になったのですが、食い食われるという事実は、自然の当然の現象であると考えてみても、目の前にみる残酷さに心重い気分にならないと言えばうそになりましょう。

わたくしの家は山のすぐ近くにあり、春になると小さな庭の樹木の枝に、山の林から小鳥がわたつてきます。木の実を求めて、黒いヒヨドリ、緑色のメジロ、また朝早くからシジュウガなどが鳴きます。小鳥について、もつと知りたいと願っていましたところ、野鳥にくわしい先生の指導を受ける機会にめぐまれました。冬から早春にかけては、小鳥たちが元気に活動する季節であり、また木が落葉しているので、目にとまりやすい好適な時期と教えられました。双眼鏡をもって京都御所にかけようという誘いがあつて、二時間ばかり一緒に歩きましたが、その間に、十種類あまりの美しい小鳥に会うことができました。同志社大学の正門を出て、向いにある今出川御門に入り、右におれて公園になったところでは、小鳥のさえずりがにぎやかに聞えました。初心者の方のわたくしには全くなんの識別もつかないのに、先生は、遠くに群れていない小鳥をみて、イカルですよ、ツグミがいますと言つて、鮮明にみえる望遠鏡を三脚に固定して、見るようにと指示されました。わたくしの双眼鏡では、小鳥がいると思つて構えてみても、一羽もとらえることができず、小枝ばかりうつるのに、先生の望遠鏡は、明瞭にイカルをとらえていました。灰色でおおわれ、黄色のくちばしが印象的で、はじめて見る野鳥の美しさに心をうばわれました。五十羽ぐら

いのイカルがパチパチと音をたてて、地上で豆のようなものを食べているようでした。灌木の上にとまっているツグミを教えられて観察すると、茶褐色におおわれた、胸や腹部の斑が上品で美しく落ち着いてみえました。落葉したムクの木のみわりには、ムクドリが群れていました。暗灰色のずんぐりした体つきの、オレンジ黄色の脚とくちばしがみえました。コゲラがいますという声で望遠鏡をのぞきましたら、イカルやツグミ、ムクドリより一まわり小さい、スズメほどの背が灰褐色に白の横斑がならび、樹幹に垂直にとまって、くちばしで木をつついていました。キツツキの一種と教えられました。小鳥たちのためにつくられた水場には、ときおり下りてきて水を飲み、羽を休めています。野鳥の好きな方でしょうか、二、三人の人たちが談笑して、今日みた鳥、昨日きた鳥について情報を交換していました。

しかし、このように人間には美しくみえる小鳥たちの生息は、自然のなかでの、生存のためのきびしさに満ちていると言わねばなりません。人の心をなぐさめてくれる羽毛の気品のある美しさも、またすばやい飛翔のあざやかさ、そして声高いさえずりも、小鳥にとっては生きるための戦いのあらわれであります。春とともに、小鳥の生理機構の変化は高まりをみせ、求愛活動が活発となり、雄と雌とは互いにその行動から信号をよみとり、特定の反応形式をとってつがいが成立します。声高いさえずりは、なわばりの闘争であり、テリトリーの確保となり、領地宣言であります。御所ではじめて見た黄色のくちばしのイカルもまたムクドリも、木の実をたべ、地に下りて、虫をさがしていました。御苑の冬の鳥という小冊子に一つの話が書いてありました。芝生の上に、鳥の羽がちらばり、一羽の鳥がその口や胸のあたりを血で赤くそめて、ハトをたべていたと言います。これはオオタカの若鳥でした。このオオタカはこの数年毎に、毎冬ここにきています。またオオ

タカがいるあたりにカラスが集り、タカの獲物をねらっているのです。そこには生物界の食物連鎖の一面があります。そしてこの冊子には、かわいそうだと思わないで、自然界のおきてなのです、とありました。

人間もまた、戦いをくりかえし、殺しあう歴史をくりひろげてきました。強いものが勝ち、弱者はしいたげられる時代がつづきました。人間もどうしようもない動物性を自分のなかにもち、欲望のはげしさにさいなまれていきます。競争社会に出られての息苦しさに耐えねばなりません。限りのない欲望の拡がり、他者との衝突を生み、はてしない破滅の道をすすむこととなるでしょう。人間は、お互いの滅亡をのがれるために、人と人との間に約束や規範をつくり、欲望の制限を自らに課してきました。

人間が自己のなかで、欲望のうずきを感じるなかで、自己を超えて、自己をつつんでいるものによつて生かされ、自分がそのまま許されていることを直観するときに、ほんとうの勇氣と明るさそして人間として行うべき目的に生かされると思います。神は、永遠を思う思いを人の心にさげられたと聖書は語っています。苛酷とも言うべき自然と人間の世界のなかで、永遠を思う心にめざめるときに、明るさと勇氣とがみちあふれると思います。新島襄先生の詩に「言うをやめよ、世事難嶮多しと。成否は明明たり天意に関す」とあります。世界のどのようなところにかかれても、卒業生のみなさんが、存在の根源、生命の源である永遠を思う心をもって、明るく勇氣にあふれ、よき働き人となって下さると信じます。

みなさまのご健康を心から祈ります。

(同志社総長)

## 同志社人の矜持

笹田友三郎



「草は春風に礼をいわない、落葉は秋風に不平をいわない」。一切を神に委ね、自然の成り行きにまかせた新島 襄がいつも口にしていた言葉であります。新島には春風も秋風も同じものでした。喜びや楽しみがくればこれを拒むことなく、喜びや楽しみが側を通りすぎるならばそれにまかせ、後を追うようなことはなかったのです。

一八九〇年一月二十二日、それは新島の死の前日であります。新島は夫人のほか小崎弘道と徳富蘇峰を枕もとに呼びました。このとき蘇峰は、「天を怨みず人を咎めず」という新島の言葉を書き取っております。同年二月二十一日、東京は京橋区木挽町にあった当時の明治会堂で新島追悼の会が催されました。「基督教新聞」の主筆・竹越与三郎の追悼演説にも、蘇峰が書き取った新島の死の前日の言葉につづいて、「新島の生涯は天に対する信頼をもって始まり、天を楽しむことで終わった」という件くだりがあります。

蘇峰の回顧によりますと、今日の同志社人があげて聖徒にしてしまった新島は「よく泣き、よく悦び、よく怒り、よく哀しみ、よく勇んだ」人間味たっぷり、ひと言でいえば「タダの人」でありました。しかし同時に、新島の内には「山をも動かす信仰と石をも泣かせる情熱」とが秘められていたのです。柔和な新島の内部にはげしい火が燃え、やさしさと力が共存しておりました。新島のやさしさとはげしさの結合、柔和な性格と大胆な精神の結合の神秘は、上述の天に対する彼の信頼にもとづくものであったといえるでしょう。

「天に対する信頼」「天を樂しむ」とは、どういうことなのでしょう。天は、新島にとってはいうまでもなくはつきりしたものでありましたが、わたくしたち人間を支配しているもの、人間の力を越えたものとして考えることもできるでしょう。天命は人間の力を越えたものですから、結果がどうなろうと心静かにこれを受け取るほかはありません。新島は「天を怨みず」といつておりますが、これは中国古代の聖賢の「足るを知る」という言葉にも通じるものであります。新島は、人間の欲望を際限のないままに肯定し放置することは人間を惨めにするのを、つとに見抜いていたのではないでしょう。新島は歴史を超えた永遠の問題を指摘していたのです。

竹越はつぎのように演説をつづけております。新島が天から与えられた仕事は、「自己追求的な世界を一変して自由と正義の天国にすること。そこでは老人は若者を助け、若者は老人をいたわり、富んだ人と貧しい人が互いに攻め合うことなく、労働には適正な報酬が与えられるような、人間の偉大な可能性の実現でありました。……彼はこの目的のために、教育に道徳を加味しようと努めたのです」。アーサー・シャバーン・ハーディーは『新島 裏の生涯と手紙』のなかで、竹越のこの演説を紹介した後で述べております。「新島の記念碑は京都を見おろす丘の上にある墓石だけではな

い。丘の下の盆地にある大学もまた彼の記念碑なのである。日本を訪問する人は誰でも、その大学がすでになしとげた結果に深い感銘を受ける」と。

諸君はいま、「キリスト教がなにかであるかを自分自身を通して具体的に示すことができた」新島の大学を、巢立とうとしております。新島は「働きたまう神に対する不拔の信仰を堅持しており、この信仰のおかげで、自我に対する信仰だけではとうてい打ち勝つことのできない落胆や失意を乗り越えたのです。自分自身の実力を過小評価していたことは彼の人格に非常な魅力をもたらしたのですが、そこにはまた彼の内部に働くより高い力に対する信頼もまじっていました。この信頼の念は彼自身の勇気の源でありました」。良心とはこうした事実、「人間の内部に働くより高い力に対する信頼」であります。人間の良心に外部から近づく道はありません。それはおそらく組織化された社会化された力にもなりえないでしょう。良心は思想ではないからであります。個人の心情のうちこそ、良心は厳然と存在しうるものであります。

獅子の仔と獅子の仔が相戯れることによつて猛々しさを学びとるように、人は人と生活をともにして人と成るように定められております。同志社人は新島精神を相学ぶことによつて、良心をバックボーンたらしめてきました。良心のもつ内的な感受性といつたらいいのでしょうか。そうしたものに支えられて、礼儀正しく、ルールをまもり、責任と義務を自覚してベストをつくすのが、同志社人の態度といえるでしょう。これは同志社人の矜持といつてもいいでしょうし、スクールカラーとよぶこともできるでしょう。スクールカラーは生活態度に裏づけられたものでなければなりません。そうであるからこそ、同志社人であるがゆえの信頼をかちとることができるのです。スクールカラーがものをいうのは、社会人となる諸君が同志社人の矜持をもって、いかに堂々と振舞うかに

かかっております。

諸君がこれから就こうとしている職業は個人的なものが社会的に実現される道であります。「政治家としては独り利巧なる政治家たるに止まらず、併せて民を愛し国を愛するの政治家に、文学者としては独り能文なる学者たるに止まらず、併せて正義を愛し真理を愛する誠実なる学者に、事業家としては独り経営力作の事業家たるのみならず、併せて正直憐愛なる事業家に」なって欲しいというのが、新島の切なる願いでありました。

わたくしはこの稿のほとんどをハーディーの著書の引用で埋めました。それは、新島のこの伝記がひとつの詩であり、ひとつの教訓として謳われているからであります。きびしい社会で、これら諸君はさまざまの苦難に遭遇するでしょう。それに打ち勝つための諸君の熱情と勇気をかき立てるには、新島の伝記にまさるものはありません。この著書の末尾にある英国の桂冠詩人アルフレッド・テニスの言葉をもって、わたくしもこの稿の結びとしたいと思います。この言葉は、「計ることのできない人間と社会に対する新島の間接的な影響力」を讀えたものといふこともできます。

「ひとつの目的はもろもろの時代を通して

疑いもなくだんだんと大きくなりながら流れており

人びとの思想は太陽の運行とともに広がっていく」

卒業生の諸君、おめでとう。諸君の門出を心からお祝いし、ご多幸とご健康を祈ります。

(同志社大学長)

## 知的で 心優しく 輝く個性をもつて

石田 章



同志社女子大学ならびに同志社女子大学短期大学部を卒業される皆さん、また今春大学院の修士課程を修了された六名の皆さんに、心から祝福と励ましの言葉をお贈りしたいと思います。

皆さんが在学された、とりわけ最後の二年間は、今世紀史上まれに見る劇的な二年間でした。長い冷戦の氷解を告げる東西両ドイツの統合、ハイテク時代の戦争の恐怖を見せつけた湾岸戦争、そして極め付きはソビエト連邦の消滅とソビエト共産党の解体。どれ一つをとってみても、今世紀における最大級の出来事が、矢継ぎ早に起ったのです。さらに国内でも、対外貿易摩擦は一段と深刻の度を増し、加えてバブル経済の崩壊は、好況に浮かれ気味なわれわれに強い警鐘を打ち鳴らしました。不透明で不安定な状況は、相変らず国の内外に満ちているように思えます。

しかしながら、その半面、今世界は、ようやくより良き未来を目指して必死な模索をはじめつつ

あるのも事実です。局地的な紛争は未だに後を絶たない現状の中でも、世界全体の流れは真剣に平和を求める方向に動きはじめていますし、地球の環境破壊に対する危機感がかつてない切実さで受けとめられ、遅まきながらもその取り組みへの姿勢が見えつつあるように思えます。

二十一世紀は目前です。皆さんは、間違いない、新たな世紀の担い手となる人達です。そして、人間が、今ほどその良識と英知を集めなければならぬ時代もないのです。いわば、新島襄の願った「良心の全身に充滿した」人材が、今こそ最も強く求められているのです。そして、同志社教育を受けたあなた方は、まさにそのような人材であることをしっかりと自覚していただきたい。

現代はまた「女性の時代」だともよく言われます。この言葉の表わす意味合いには、多少のニュアンスの違いはあるにせよ、社会がこれからますます優れた女性の能力を必要とすることは誰の目にも明らかです。皆さんは、これからさまざまな分野でそれぞれの道を進んで行かれるわけですが、同志社女子大学の卒業生としての心意気を忘れず、遺憾なく実力を発揮していただきたい。あなた方の先輩諸姉のためまぬ努力によって勝ち得た本学卒業生に対する高い社会的評価に、あなた方がさらに一層の輝きを加えてくださるならばこれに過ぐる喜びはありません。

社会のいろいろな分野で指導的な立場におられる方々から本学の卒業生についていただく評言の多くは、「知的で、心優しく、個性的だ」ということです。ありがたい評価だと思えます。だが、よく考えてみると、これら三つの特色は、実は互いに相容れない特色であることが多いのです。にもかかわらず、本学の卒業生が、このしばしば相反しかねない特性を立派に調和させ、均整のとれた優れた人格を形成させていることが私には何よりもうれしいのです。

知的であるためには、明確な自己の確立が不可欠です。言うべきことははっきりと発言する。こ

れはどんな社会にあつてもきわめて大切なことです。しかし同時に、自らの発言に、多くの人に耳を傾けさせるためには、言葉を裏打ちする人格が必要でしょう。優れた個性と言つてもよいかも知れませんが、最近では、個性をなにか奇をてらう単なる目立ちたがりやと履き違えている向きも多く見かけられますが、真の個性とは、そのような皮相的なければいけないものではなく、その人の深い内面から自ずと滲み出てくる、その人にしかない魂の内なる輝きであると私は思います。そういうすぐれた個性を努めて身に着け、磨いていってください。

そしてもう一つの「優しさ」ということ。優しさはよく弱さと混同されがちですが、真の優しさは弱い心からは生まれては来ません。優しさとは、本当は、強いことだと思えます。真の優しさは、他者への真の愛なしには生じえないからです。そして、真の愛は、弱い精神からは決して生まれません。私たち人間は、今ほどに、すべてのものに対して、ひとに対し、動物に対し、自然に対し、わが地球上に在るすべてのものに対して、心優しくあらねばならないのです。

これからあなた方が踏み出す道は、決して平坦なものではないでしょう。けれども、たとえどのような苦難に出会つても、くじけることなく勇気を持ってそれに立ち向つていってください。神は、人間が越え得ないほどの苦しみを、人間にお与えになることはないはずですから。

皆さんのご多幸を、心から祈っています。

(同志社女子大学長)